令和２年２月 15 日

万富東大寺瓦窯跡の復元

岡本芳明

【講座の概要】

万富東大寺瓦窯跡は、「源平の戦い」で焼失した東大寺の再建瓦を製造した窯跡で、瓦は、大仏殿のみではなく中門や回廊、南大門、鐘楼にも使用され、30 ～ 40 万枚の瓦が生産されたといわれる。

第１図　万富産東大寺軒丸瓦

現在の大仏殿は、江戸時代に再建されたもので、鎌倉期再建の大仏殿は江戸期よりひとまわり大きいと考えられている。江戸期再建の大仏殿では、約 13 万枚の瓦が使用されており、鎌倉期の大仏殿ではそれ以上の瓦が使用されたであろう。建久四 (1193) 年、備前国が東大寺造営料国となり、この頃に万富東大寺瓦窯跡の瓦窯が構築されたと思われる。建久六 (1195) 年には大仏殿と中門が完成しており、わずか数年でそれを補う瓦が生産されている。

これまで、昭和 54(1979) 年に岡山県教育委員会が、平成 13(2001)・14(2002) 年に瀬戸町教育委員会が発掘調査を行っている。調査で確認された瓦窯は、２条と４条の分焔牀を持つ２種の半地下式平窯で南北 14 基が並ぶ。瓦窯は、何基かでまとまっており、ほかに管理棟と思われる礎石建物、工房や暗渠排水施設などが確認されている。

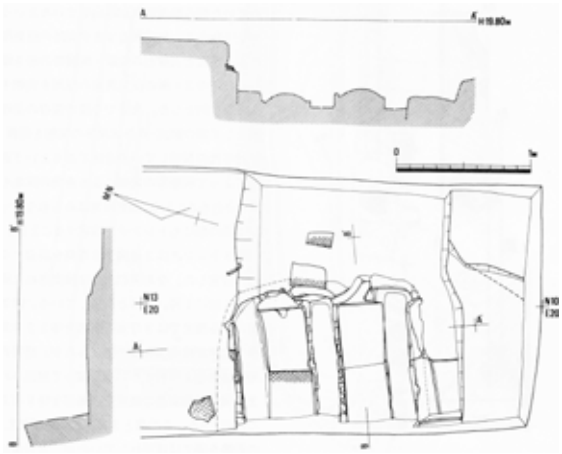
万富産の東大寺瓦は、瓦当面に「東大寺大仏殿」の文字を配置している。平瓦の凸面には、叩目文様があり１型から７型に分類される。また、一部の瓦には、「東大寺」の刻印があり、数 10 種類に上る。

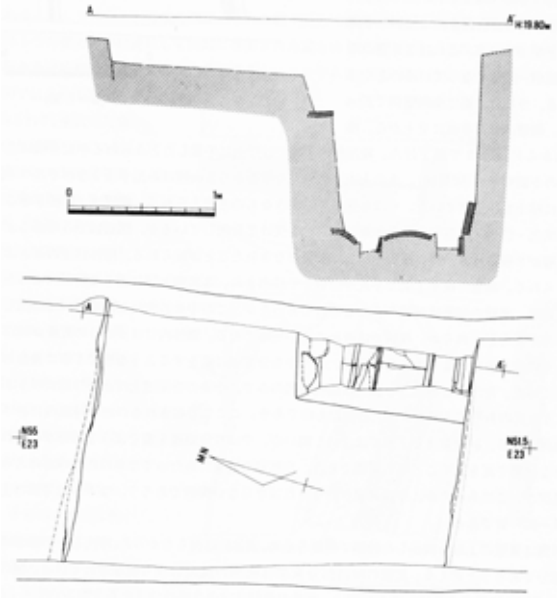
今回は、各遺構と叩目文様や刻印との関係から、万富東大寺瓦窯跡の瓦生産の状況を復元してみたい。

【交通】万富東大寺瓦窯跡：JR 山陽本線「万富駅」から北東へ徒歩約 400m

【引用・参考文献】

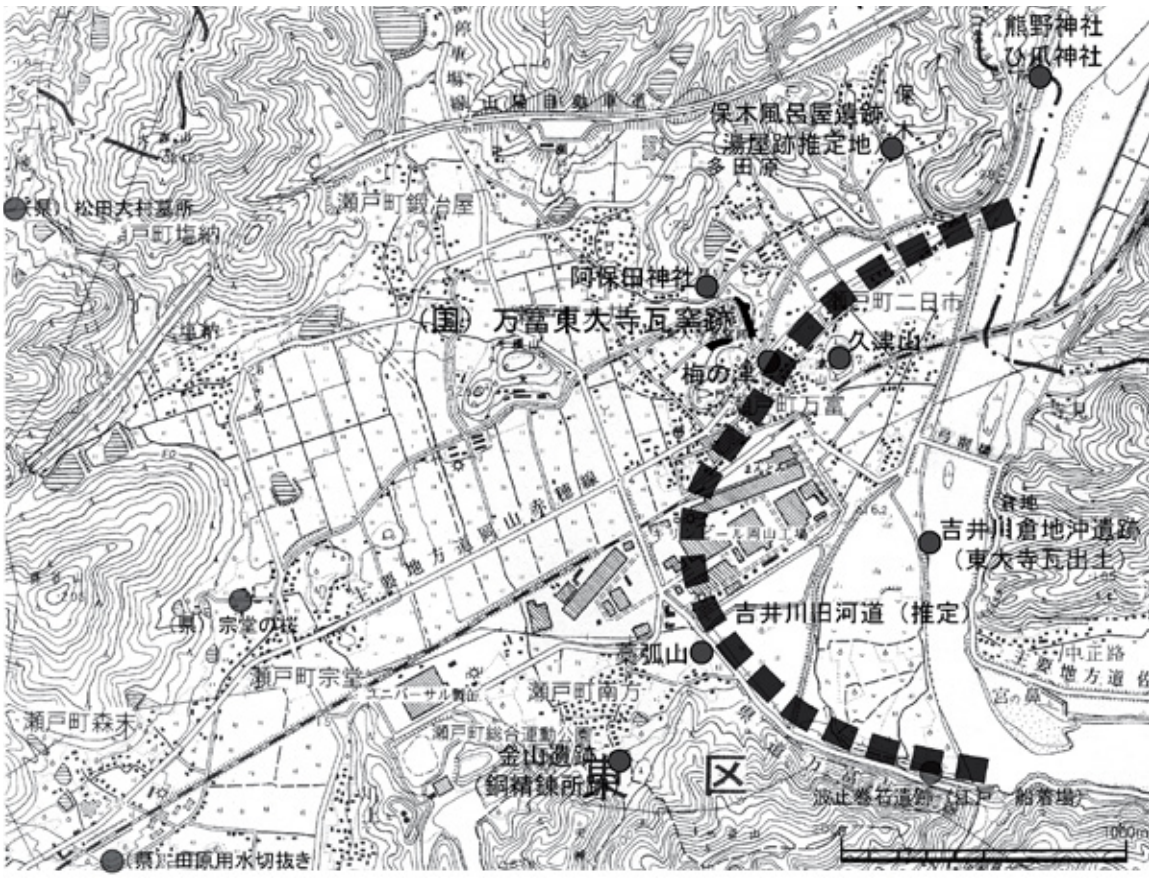
『改修赤磐郡誌』赤磐郡教育会 1940　『俊乗房重源の研究』有隣堂 1971
『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 37 岡山県教育委員会 1980（図２・３）
『瀬戸町誌』瀬戸町 1985　『重源上人』四日市市立博物館 1997　『東大寺』学生社 1999
『史跡万富東大寺瓦窯跡確認調査報告』瀬戸町教育委員会 2003（図５・６）『旅の勧進聖重源』吉川弘文館 2004



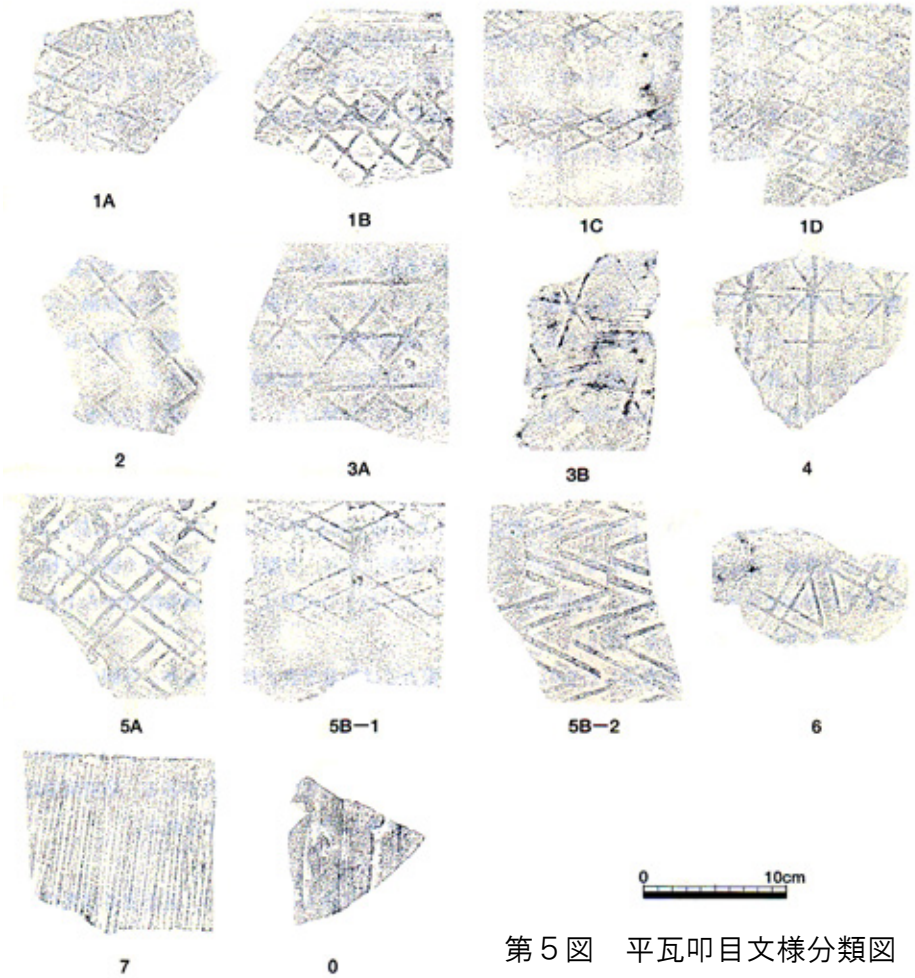


第２図　２号窯実測図　（上）

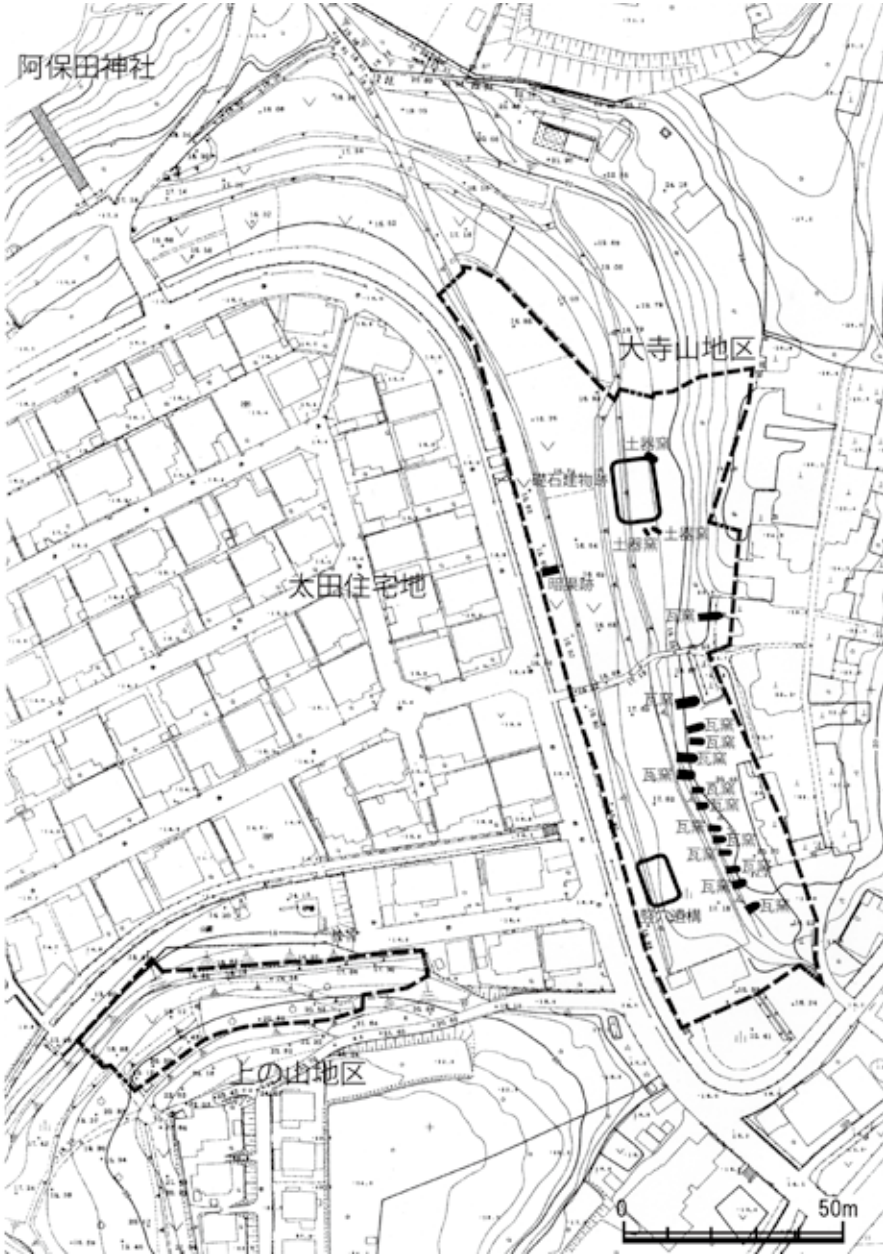
第３図　13 号窯実測図（右）



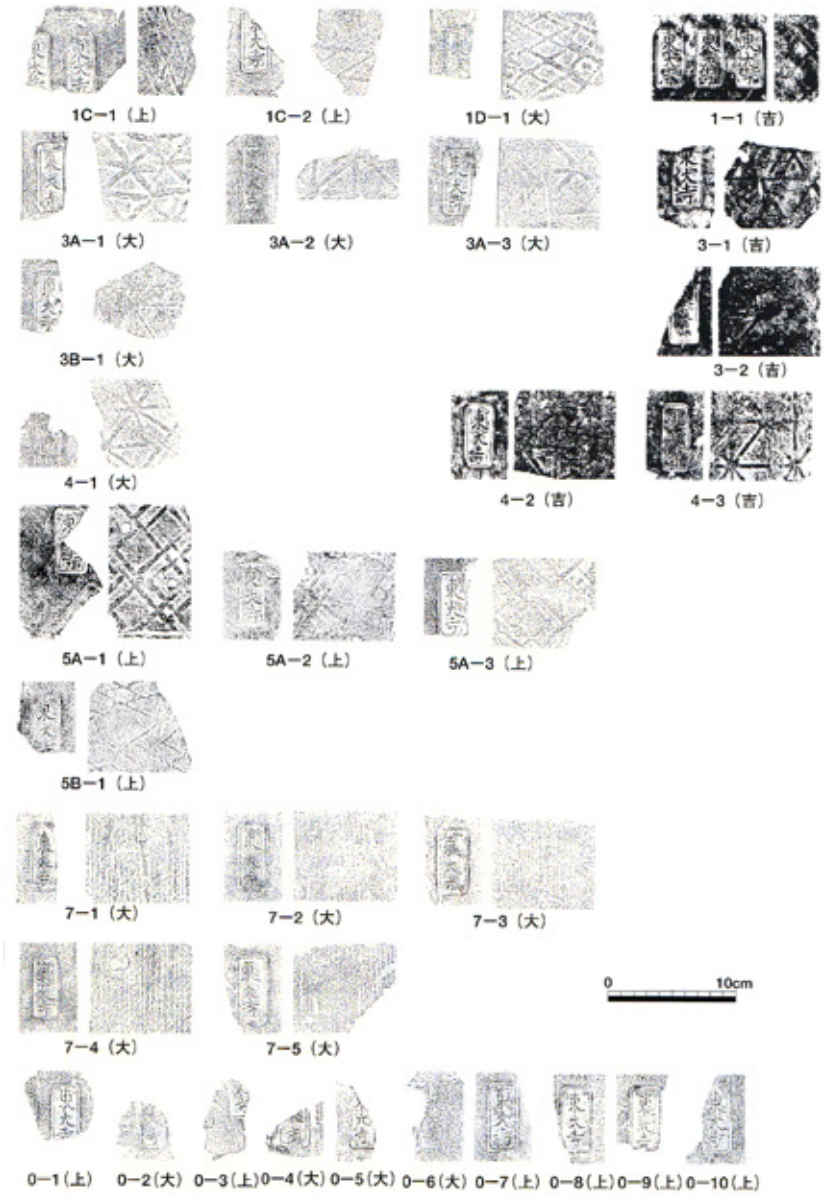
第４図　万富東大寺瓦窯跡と周辺遺跡



第５図　平瓦叩目文様分類図



第７図　万富東大寺瓦窯跡遺構配置図



第６図　「東大寺」刻印集成図

第８図　万富東大寺瓦窯跡想像図

東大寺再建略年表

西暦	和暦	事　　項
1180	治承四	源平の争乱で東大寺が焼ける。
1181	治承五 養和元	重源、法然房源空の推薦により東大寺復興の責任者（大勧進）となる。 重源、宣旨を賜り勧進帳を作成し、一輪車六両を造って諸国を勧進す。 重源、東大寺大仏の螺髪を鋳始める。
1185	元暦二 文治元	東大寺が許可を得て備前国長沼荘と神崎荘を開発。 東大寺大仏開眼供養。
1186	文治二	周防国が東大寺造営料国となる。翌年より、杣から木材を切り出す。 重源、周防国に向いその帰途、備前国に立ちよる。
1187	文治三	この頃、重源、周防阿弥陀寺創建。東大寺浄土堂を建てる。 東大寺造寺長官藤原行隆が備前国南北条荘を東大寺へ寄進。 この頃までに東大寺が備前国の南北条荘、長沼荘、神崎荘を開発する。 重源、備前国荒野開発を願出、その妨害停止を奏上。
1190	建久元	東大寺大仏殿上棟。東大寺東南院再建。
1193	建久四	播磨国・備前国が東大寺造営料国となる。この頃、備前国の荒野を開発。重源、備前金山寺の修造結縁。
1195	建久六	大仏殿・中門などが完成。東大寺供養が行われる。後鳥羽天皇、源頼朝が参列。重源、大和尚号を得る。
1196	建久七	東大寺領の備前国荒野を同野田荘との交換が認められ不輸地となる。 宋の石工・伊行末等、東大寺大仏殿の石の脇士像、四天王像、中門の石獅子などを造る。
1197	建久八	東大寺大湯屋鉄湯船を造る。東大寺戒壇堂、八幡宮の造営。
1199	建久十 正治元	東大寺南大門の上棟。 東大寺法華堂を修造。
1200	正治二	東大寺開山堂を修造、尊勝院再建。
1203	建仁三	東大寺南大門の仁王像、運慶・快慶らにより造像。 東大寺総供養。重源、活動の実績を『南無阿弥陀仏作善集』にまとめる。 『備前国麦進未進並納所所下惣散用状』に万富産の瓦を示す「吉岡御瓦」の字句あり。